

現代社会における葬儀

林 謙太郎

(小川賢治ゼミ)

現代社会では社会情勢の変化とともに葬儀のスタイルや費用も変化している。普段、あまり考える機会のない葬儀に関して知ることで、社会の変化と人々の暮らしや想いの移り変わりを知る。近年では「無宗教葬」と呼ばれる、宗教にとらわれない自由形式の新しい形式も増えており、葬儀の形式や費用は利用者のニーズにあわせて多種多様化してきている。以前の様な、葬儀は大規模でお金をかけて行うといったような考え方も社会の流れと共に変化してきているのではないだろうか。葬儀にかかる費用の減少や特定の宗教を信仰する事が少ない現代人の特徴、地域コミュニケーションの希薄化、都市部と地方での暮らしの変化といった様々な要因が絡み合って葬儀の形式や費用が大きく変化してきているのではないだろうか。葬儀は社会情勢や人々の想いによって形式などを変え、そして定着していくようである。

葬儀の形式は大きく4つに分ける事が出来る。一般的に葬儀と聞いて思い浮かべるのは「仏式」と呼ばれる仏教の儀礼にのっとって行う葬儀ではないだろうか。通夜をして僧侶による葬儀、火葬や告別式を行うのだが、これもまた宗派や地域によって違いがある。この「仏式」だけではなく、神道の儀礼にのっとって行う「神式」、カトリック・プロテスタントの儀礼にのっとって行う「キリスト教式」、前に記述した、宗教にとらわれない「無宗教葬」といった、宗教によって違う葬儀の形式がある。それぞれに宗教的観念から、葬儀や死者に対する考え方がどのように違うのか。仏教離れがどこまで進んでいるのか。本論文では、これから更に変化していく社会情勢と共に、自分自身が葬儀へ参列するという事が増えていく中で、これまで当たり前のように行われてきた葬儀に関して、その成り立ちや地域や宗教によって変わる形式を比較し研究する事が、今と昔、そしてこれから、どのような意味をもっていかを考える。ま

た、いざという時に困らない為に葬儀に関する知識を得る事が出来たらと思う。

第1章 葬儀事情

第1節「葬儀」とは

本論文では「葬儀」について取り上げていくのだが、そもそも葬儀とは何だろうか。葬儀とは人の死を弔う為に行う祭儀である。「葬儀」という言葉は、正確には「葬送儀礼」を略したものである。だから「葬儀」と言えば、亡くなってから、湯灌や納棺、通夜、葬儀式や告別式、出棺、火葬、法事、納骨といった一連のことを指している。宗教の違いがそのまま、葬儀の形式の違いになっている。ここまでは一般的な認識であるが、もう少し深く掘り下げれば、葬儀とは故人のためだけではなく、残された遺族や人たちの為に行われているという意味合いも強くあるのである。故人と関係あった人たちが、死を受け止め、心の整理をしてけじめを付けるといった事を行う為の機会であるのが「葬儀」と考えられる。

第2節「葬儀」の形式(宗教的)

(1) 形式は大きく4つに分ける事ができる、一般的な「仏式」に加え「神式」、「キリスト教式」、ここ数年で増加している「無宗教式」である。これらの割合を見ると、仏式89.5%、神式3.2%、キリスト教式1.7%、無宗教式3.4%、となっている。地方では依然として仏教葬が多いが、特に都市部では大きく減少している。埼玉、東京、神奈川といったいわゆる首都圏ではこれが顕著であり、仏式82.7%、無宗教式7.8%と、大きく無宗教式が増加している(2007年12月 財団法人日本消費者協会第8回「葬儀についてのアンケート調査」による)。

(2) 4つの形式の違いとは何だろうか。まず仏

式と神式の大きな違いは、仏教は即成仏を祈るのに対して、神式は故人の霊が家の守護霊・氏神（その土地の神社に祭られている神）として祭られる。神道では死は穢れとされているため、弔事の儀式を神社で行うことがない。神式では「神から生まれた命が、また、神の下にその霊が還り、遣された者の近くにあって見守ってくれるように祈る」ということが基本的な意味なのではないだろうか。仏教では「死者を生きているかのようにして扱ひ、仏の弟子にして浄土に送る」儀式なので、僧侶になる儀礼に類似して、剃髪と言って頭に刃をあて、戒名という仏弟子としての名前を授ける（授戒）。また、死出の旅路を迷うことなく迎えるようにと引導を渡す。このように、授戒と引導からなるのが一般的だが、浄土真宗や日蓮宗では葬儀は斎場・式場か自宅で行う。仏式では戒名があるのに対して神式ではこれが無いが、戒名に代わるものとして名前の下に、男は「大人（うし）」「彦（ひこ）」「翁（おきな）」、女は「刀自（とじ）」「姫（ひめ）」「媪（おうな）」等をつけ、そのあとに「命（みこと）」を添えるのが一般的である。位牌に相当するものとして、霊璽（れいじ）、別名は、御霊代（みたましろ）と呼ばれるものがある（HP 神道の葬式 神葬祭、HP 表現文化社葬儀式とは）。

キリスト教式を見ていくと、キリスト教の死に対する考え方は、死はすべての終わりではなく、「神に召された」ものと考えられ、祈りや礼拝は神に向かって捧げられる。「死という厳しい現実を受け止め、死者の一切を神に委ね、遣された者への神の導きを祈る」ということに基本的意味があるとされている。無宗教葬は、葬送・葬儀において宗教的要素を除いた葬儀である。僧侶・神官・牧師・神父といった宗教者を招かずに行うものである（HP 葬儀・お葬式ガイド「葬儀 Q&A」、HP 無宗教葬 .com）。

第3節 葬儀の形式（様式）

葬儀を行うにあたり、宗教的形式だけではなく様々な形式がある。直葬、一日葬、一般葬、家族葬、その他の形式・様式、と葬儀の形式を大きく分けることが出来る。近年よく耳にする「家族葬」だが、これは参列者が親族のみのケースを指し、これといった形式が決まっているわけではない。そ

の為、必ずしも「家族葬＝費用が安い」ということではないが、一般的な葬儀に比べ、参列者が少ない事で、葬儀にかかる費用が少ないのは確かである。以前と比べ、利用者の葬儀を安く行いたいというニーズにあわせて形式も多種多様化してきているのである。

第2章 葬儀の必要性

そもそも、葬儀は必要なのだろうか。我々は、人が亡くなれば葬儀を行うのが当たり前という認識である。しかし、葬儀を行わなければならないという法的義務がある訳ではないのである。人が亡くなった後、葬儀までの流れは、①医師に死亡診断書を書いてもらう②役所に提出する③火葬許可証をもらう④葬儀をおこなう、といった流れである。③の火葬許可証を受け取ったあと、どうするかは法的に決まっている訳ではないので、葬儀を行わなくても構わないのである。火葬を行い、そのまま埋葬しても何も問題がないのである。法的に葬儀をしなくても罰せられないのであれば、高額な葬儀代を支払わなくていいのである。しかし、葬儀を行うという事はお金の問題ではないのではないだろうか。

葬儀を行わない場合を考えてみると、まず、故人と関係があった人たちには死者とのけじめがつかないという点がある。遺族や友人たちは何らかの形でその死を確認したいという思いがあるのではないだろうか。死者とのけじめをつける機会が葬儀への参列ではないだろうか。次に、以前死者と関わりのあった人たちが、せめて焼香だけでも自宅へ来訪することがあり、葬儀を行うより面倒な事態を招く事があった。しかし、現代社会ではそういった事態も減少してきている。これは、人間関係の希薄化が関係してきているのではないだろうか。

葬儀を行うということは死者の弔いであるという事だけではなく、残された遺族や関わりのあった人たちが後腐れ無くけじめをつける為にあるのではないだろうか。人類が古代から葬式を行ってきたというのはそこに一定の役割があったからである。葬儀の必要性については一概に言えないが、残された者の思いを考えれば必要なのではないだ

ろうか（島田、2010、pp.19-27）（HP 斎場図鑑 葬儀の必要性と不必要性）。

第3章 葬儀費用

第1節 葬儀にかかる費用

葬儀を行うのに多額の費用がかかるというイメージが強いが、何に費用がかかるのだろうか。少子高齢化、格差社会、景気低迷、増税、医療保険問題、年金問題などの社会問題によって、葬儀は小規模・家族中心になってきており、葬儀にかかる費用は減少傾向にある。全国平均は約148万円（平成22年日本消費者協会調べ）となっている。その内訳は①葬儀そのものにかかる費用（お棺や枕飾り、ドライアイス等、葬儀を執り行うにあたって必要な品物、サービスに対してかかる費用）②飲食他の費用（参列者に対して提供する飲食費用、返礼品、寝台車等の車両関係、お供花等にかかる費用や、自宅や集会所ではなく葬儀場を使用する際の費用、また火葬場の使用料等）③宗教者への謝礼（読経や戒名〔法名等〕の授与に対して払う謝礼。日本消費者協会の調査データによると、これらの費用は全国平均で51.4万円。読経や戒名等が不要の場合はこの費用は発生しない。）となっている。

どれも葬儀を行うにあたり必要な物であるが、③の宗教者への謝礼というのは最もわかりにくい物である。御布施とも呼ばれるが、御布施は読経や戒名に対するお礼で、お経料と戒名料が主なものである。この御布施は本来、金額が決められているものではなく、遺族が支払える範囲で行うものである。また戒名をいただくということも売買の対象ではないので、値段がつく戒名料という呼び方はふさわしくない。最近では、主な宗派が加盟する全日本仏教会でも、戒名料という呼び方はしないと表明している。従来はお寺と檀家の関係が築かれていたため、檀家同士で御布施の相場が共有されていた。しかし核家族化が進行するなかで菩提寺を持たない家族が急増し、それが崩れてきたのである。またお寺にしても、御布施の使い道や戒名の意義を積極的に説明してこなかったため、不透明感がより増大しているのである。

御布施の金額は、お寺との付き合いの程度や、

寺院の格、地域などによっても異なっている。宗派や寺院、地域によって異なるが、戒名ランクによる御布施の一般的金額は、「信士・信女」で20万～30万円、「居士・大姉」で30万～50万円、「院号」で50万～100万円といわれている。戒名料の問題は、お寺に対して一般の人が持つ不信感の最大の原因になっているが、お寺の存続や、今後もお寺による供養を願うかどうか考えることも大切なことなのではないだろうか。

葬儀関連で正規に支払うもの以外に心づけ、いわゆるチップを慣例として渡すことがある。金額はあくまでも目安であり、お世話になった度合いや関係などによって違ってくる。世話役には5千円から1万円、代表には1万円から2万円、近所の手伝い人には2千円から3千円という目安になっている。また、病院からの遺体搬送費というのが存在する。基本料金が9500円で10キロ単位で加算される。10キロまでは2730円、20キロまで4860円、30キロまで7800円となっている。

返礼品である香典返しは一般に「半返し」と言われる。集る香典の額は亡くなった人の社会的地位、現役か非現役かなどによって異なるが、全国平均では72万円ほどである。香典返しは四十九日の法要が済んでからなので時間的にも余裕がある。最近は何点かの品物がセットになっているギフト商品を香典返しに使うケースも多くなってきている。貰う側はセットの中から自分の気に入った商品が選べるわけで合理的といえるかもしれない。

第2節 葬儀代を安く抑える

葬儀代を安く抑えるにはいろいろな方法があるが、まず葬儀社と相談する時にざっくりばらんに予算がこれだけしかない、この予算内でやって欲しいと希望をだすことである。桁外れの値段でなければ断る葬儀社はないはずである。セット料金やオプションものを最低ランクにしてもらう、霊柩車、火葬費、通夜ぶるまいなどの飲食代も最低ランクにする。生花や飾り物を極力少なくするなど削れるものは出来るだけ削る、これが安くする近道である。また、市民葬や区民葬を利用するというのも一つの手ではないだろうか。区民葬を例にとると区役所の区民課などに行き医師の死亡診断

現代社会における葬儀

書を提出して区民葬儀券を貰うと区民葬祭具券・区民葬霊柩車券・区民葬火葬券の三つがついている。この三つにはそれぞれランクがあって選択できるようになっている。もっともランクの低いものを選択すればかなり安くなる。東京都の場合、各区で出している「わたしの便利帖」という冊子に詳しい料金などが載っている。

料金を安く抑えるだけではなく、互助会に入り月々の会費を積み立てておいていざという時に備えるという方法もある。契約の内容によっては積み立ての期間に満期になれば積立金を自由に使えるというものもある。互助会や葬儀社によっては毎月一定額の積立金を納める事によって葬儀ができ、葬儀費用の保険金が受け取れるという特約付きのものもある。また、ある互助会の積み立て保険は終身保険で、契約者が死亡すると保険金が下り葬儀費用に当てる事が出来るというものもある。特典として斎場や会葬御礼が割引になるなどといったものもある。

単純に葬儀の内容を質素にしてランクを下げ安くするという選択だけではなく、互助会や葬儀にも使える保険への加入をすることで突然の葬儀に備えるという事が大切なのではないだろうか（位牌がよくわかる HP- 戒名について、くらべる葬儀 HP- 葬儀費用について、いい葬儀 HP- 葬儀を行う - 葬儀費用）。

第4章 県別葬儀事情

都道府県によって葬儀のしきたりや風習・葬儀事情が違う。また、葬儀の形式や費用の違いだけではなく、地域の特色や意識が葬儀に関係している。この章では、いくつかの都道府県を例に上げていく。

①東京都

東京都には民営の火葬場がある。全国的にみれば、火葬場は自治体が運営しているのが一般的だが、東京都 23 区部に 9 つある火葬施設の中で、公営の火葬施設は 2 件のみである。あとの 7 件は民間の企業が運営している。これは全国的にも珍しく、人口が密集していて、火葬場不足が問題となる東京ならではの事ではないだろうか。自治体が新たに公営の火葬施設を建設しようとしても、土地が

なかったり、付近の住民の反対運動などが問題となったりして、民営頼りになっている。更に、東京都では式場が不足がちとなっていて、人気のある公営施設や火葬場併設の民営施設などでは、1 週間先まで予約が埋まっていることがある。そういった施設での葬儀を希望する場合は、通夜が出来るのが 7 日後ということも珍しくないのである。故人は、お葬式までの間、自宅で安置するケースが通常だが、住宅事情などの問題から、火葬場に併設されている冷蔵保管庫や葬儀社に預け、通夜当日まで安置するケースもある。また、東京に呼び寄せていた田舎の親が亡くなったという場合などでは、火葬だけを東京で行い、後日遺骨となって田舎へ帰った際、地元で骨葬を行うということも数多く見られる。火葬と葬儀をまったく別々の地域で行うということは、大都市だからこそ見られる現象ではないだろうか。東京では、焼香に来た一般参列者にも通夜料理を振る舞う。式場などで焼香をした後、別室で、寿司やオードブル、煮物、そして酒などの飲み物が振る舞われる。これは「通夜振舞い」と呼ばれ、参列者は一口でも箸をつけることが供養になるとされている。

②北海道

北海道では、葬儀の受付で香典を出すと、目の前で封が解かれ、中身を確認する。そして「5 千円でよろしいですか」と確認されたうえで、名前が記入された領収証が発行される。但し書きはもちろん「香典代として」である。葬儀専用の領収証も売られているくらい、北海道では常識となっているならわしである。会葬御礼の品物も、QUO カードや図書カードなどの商品券を用いることから、合理的な道民性とも言われている特徴をうかがい知ることができる。

道内では、死亡通知に新聞の訃報広告を利用することが一般的である。特に地元紙である北海道新聞には、一般人の訃報広告専用のページが設けられている。このページには、黒枠で囲われた訃報広告が紙面に所狭しと並んでいる。地方紙とはいえ、シェア 50% にも迫る最有力媒体で、地元密着型に加えて部数も多いため、需要が高いのではないだろうか。また、希望すれば訃報の折込チラシも入れることができる。

通夜の前に火葬を行う地域がある。道南など一

部地域では、通夜の前に茶毘に伏し、遺骨で通夜、葬儀告別式を執り行う。最初が火葬、続いて通夜、翌日に葬儀・告別式を執り行うというわけである。一説によると、昭和29年の洞爺丸沈没事故の影響とも言われている。青函連絡船が台風にあって転覆し、千人以上の人々が亡くなったため、火葬を急がなければならなかったのだそうだ。それが定着した独特の風習なのかもしれない。

③岩手県

葬儀式場へは遺族が後から入る。全国的に見ると、お葬式の際は遺族が先に会場に入って、参列者を迎える格好になるのが一般的だが、岩手県ではその逆で、先に参列者が会場に入り、その後で遺族が行列して入場することがある。その後、僧侶が入場し、葬儀が始まるのである。また、通夜を何度も行う地域もある。岩手県は雪深く山も多い地域なので、昔は今ほど行き来が簡単ではなかった。県内でもさまざまな風習が見られる。多くの地域で、逝去から葬儀式までを3日～5日間空けるのも、その移動時間を取るために始まった風習なのかもしれない。沿岸部などでは、逝去から葬儀まで毎夜、供養を行い、これをすべて「お通夜」として営み、県央部などでは、火葬の前日にお通夜を営み、通夜が終わった夜にもう一度同じような内容の儀式を営む「お速夜（たいや）」を行う。この速夜は、近親者のみで行うことがならわしで、一般参列者は遠慮するのが一般的である。かつては「大夜」とも書き、命日の前日の夜（午後～夕方）を指した（葬儀の前夜とは違う）。基本的に「法要」というものは、「速夜」「晨朝」「日中」で1セットで行われ、速夜は午後を指し、晨朝は早朝を、日中は午前を指している（例えば、速夜：13:00、晨朝：6:00、日中：10:00などである）。

納棺の際、副葬品として故人の愛用の品や、旅支度の杖や脚絆などを入れる風習は全国的に見られるが、このとき「六文銭」といって、紙に一文銭を六つ印刷したものを入れることがある。「三途の川の渡し賃」とも言われていて、昔は本物の六文を入れていたのではないだろうか。貨幣価値が変わった今でも、慣習だけ残っている。さて、岩手県でもこの風習は残ってはいるのだが、他の地域とは一味違うのが金額である。岩手県では紙に「100万円」と書いて棺に入れる風習があると

いう。これには、故人があのお世でお金に困らないようにとの思いが込められていて、中には「1千万円」とか「1億円」と書くこともあるという。

④長野県

全国的には都市部を中心にあまり見られなくなった地域の近隣組織「隣組」だが、人の移動や流れの少ない地域では、今も全国的に見られる。「隣組」とは、10軒程度の家が一単位となって、通夜・葬儀の際に喪家を手伝う組のことで、「葬式講」と呼ぶ地域もある。この隣組は、特に長野県では強力に機能していて、地域の強い「絆」が重要な役割を担っており、お葬式の手伝いなどは特に重要な仕事と捉えられている。会社の仕事よりもお葬式を優先するのが当然と考えられている地域もある。隣組のメンバーが勤める会社も、地域コミュニティの一員であることも多いため、会社を休んでお葬式の手伝いをするに關しても理解があるようだ。葬儀社に葬儀を依頼する際も、遺族と葬儀社だけでなく、葬式組の代表との打ち合わせも欠かせない。

また、面積の広い長野県は、土地によって様々な風習が見られる県である。長野県の一部地域では、通夜の香典袋のほかに、紅白の水引をかけ「お見舞い」の表書きを用いた袋を用意することがある。これを見た他の地域の人は驚く事が多く、この風習を知らずに喪主となった場合も、大変戸惑うだろう。これは、決しておめでたいと思っているわけではなく、「入院中にはお見舞いに行けず今になってしまって申し訳ありませんが、どうぞ受け取ってください」という意味が込められていると言う。遅ればせながらのお見舞金を、通夜の席でお渡しするという意味なのである。しかし、特に親しい間柄でなければ、通常の香典のみを用意するほうが一般的のようである。

長野県では、通夜の翌朝に火葬をして、その後葬儀を行う「前火葬」と、通夜、葬儀が終わった後に火葬を行う「後火葬」の地域が混在している。葬儀・告別式の後に火葬を行う「後火葬」の地域では、出棺時に遺族が「いろ」と呼ばれる白い布を肩にかけて火葬場へ向かう。これを「いろをつける」という。そもそも白という色は、白蛇や白狐など神仏の使いの動物が白い色をしているように、この世とあの世を結ぶ霊界の象徴とも考

えられている。白い布を身につけることによって、故人と同じ格好をすることになるわけだが、「故人があのお世へ旅立つ前までは、私たちが故人を共に見送るが、そこから先はお一人で旅立ってください」という意味が込められているのである。

⑤愛知県

愛知県では、通夜の際、香典のほかに「お淋し見舞い（おさみしみまい）」または「寂し見舞」といって、別途遺族に渡す風習がある。お淋し見舞いには、お菓子やお酒、缶詰など、主に食べ物や飲み物を用意することが多く、遺族は通夜の後、故人が淋しくないように語り明かす際、いただいたお淋し見舞いを食べながら過ごし、残った場合は皆に配る。お淋し見舞いをいただいた関係者には、香典返しの品物もより多くお返しするのがならわしである。また、地域によっては、関係者が持ち寄ったお淋し見舞いを、持ち寄った関係者も含めて皆でいただくという風習もあり、こちらは遺族が淋しくないように皆で元気付けるという意味合いが見て取れる。さらに、額に三角の白布をつけて出棺に立ち会う。よくTVなどで幽霊役の人が身につけている、あの三角の布である。これをお葬式のときに身につける風習が全国各地に点在して見られる。愛知県の一部地域では、出棺の際に男性が白い三角の布、もしくは白い紙を頭に巻いて出棺に立ち会う風習が見られる。この白い三角の布は死装束のひとつで、仏教では「宝冠（ほうかん）」と呼ばれている。白蛇や白狐など神仏の使いの動物が白い色をしているように、白い色はこの世とあの世を結ぶ霊界の象徴とも考えられているのである。

愛知県の尾張地方では、精進落しの際、「出立ちの膳」といって近親者が簡素な精進料理を食べるが、このとき、胡椒汁や唐辛子汁が出されることがある。これは「涙汁（なみだじる）」とも言われ、大変な辛さから涙を流すという意味合いと、辛さによってお葬式の疲れをとるための意味があるとされている。

⑥京都府

京都府では、友引の葬儀には「友人形」を棺に入れる。友引の日に葬儀をしない地域は全国的にも多数あるが、これは、その土地のしきたりとい

うよりも、火葬場の休業日となっているため、結果的に葬儀・告別式ができないという理由からのようである。しかし、京都府では、火葬場が開いているため、友引の日でも葬儀・告別式を行うことができる。そもそも、友引とは六曜の中でも決して縁起の悪い日ではなかったが、本来の意味である「勝負なし、共に退く」という意味を「死者が友を引いていく」つまり「死者が友を連れて行ってしまふからさらに死者が出てしまふ」という意味に転じて始まった迷信である。要は単なる語呂合わせなのである。迷信とはいえ、その意味を知っている人にとっては、あまり気分のいいものではないので、京都府など、友引の日にも葬儀を行う地域の多くは「友人形」（「供人形」とも書く）といつて、いわば人間の身代わりとなる人形を棺に入れる風習が広く行われている。また、葬式では「供花」といって、花を故人に供える。全国的には菊などの花を使うことが多いのだが、京都府では、京都市より南の地域で、この供花に「檜（しきみ）」を用いることがある。この檜とは、古くから日本に自生していた常緑樹で、香りが強いのが特徴である。また、檜の実には猛毒があり、動物が近寄って荒らさないよう、墓地にも植えられていたという。この檜を供花として使うのは、故人に邪気が近寄ってこないための魔除けの意味がある。葬式で使用する香典袋の水引は全国的には白と黒のものを使うが、京都府の多くの地域では黄色と白の水引を使うことがある。葬儀で黄白の水引を使うのは、関西圏にしか見られない風習である。一説によれば、黒は宮中で使用されていた「玉虫色」に似通っているため紛らわしく、その次に「喪」を表す色である黄色を使い始めたことから由来しているとも言われている。

⑦沖縄県

沖縄県には檀家制度がない。全国的にみられる檀家制度は、江戸時代の「寺請け制度」から始まったものである。これは、現在の戸籍のような役割と、キリスト教弾圧の役割を持った、国民総仏教制度だった。ところが、江戸時代の沖縄は琉球王朝として独立した存在で、徳川幕府に属していないから、寺請け制度も無く、よって現在の檀家制度も根付いていないのである。お葬式の際に読経を希望する場合は「どのお寺に依頼しても良

い」とされている。また沖縄では、枕飾りにも独特のならわしがある。枕飾りに供えるのは、白木の位牌、花や箸を立てた一膳飯のほか、豚の三枚肉、塩と味噌、おまんじゅうなども供える。沖縄以外の地域では、肉を供えるということはほとんど見られないので、沖縄の琉球文化特有の風習といえるのではないだろうか。

沖縄県で使われている棺は、全国的に使われている棺と比べて長さが短く、深いものがある。これは故人を納棺する際、膝をすこしだけ立てて納棺することからきている風習である。更に沖縄のお墓は、本土のお墓と比べてもはるかに大きく、形状もまるで家と見間違えるような屋根つきの「亀甲墓」「破風墓」が数多く建っている。内部は8畳程度の広さがあり、中には住宅を建てるときと同じように、基礎から工事をする、もはや立派な「建築物」もある。これは、古くは故人の遺体を自然に白骨化させる「風葬」や「洗骨」の習慣があったことからきている。今では火葬されているが、お墓の風習だけは残っているのである。

以上、いくつかの都道府県を例に上げたが、それぞれ県によって同じ葬儀でも全く異なるしきたりや風習を見る事が出来る。県単位だけではなく、細かく地域毎にも葬儀事情が異なっている。しかし、家族葬や無宗教葬が増加している中で、こういった風習やしきたりがあまり見られなくなっているのも現実である（HP 全国葬儀事情ガイド）。

第5章 葬式は家から個人へ

葬式は家という単位から個人という単位へと移り変わっている。特に、都会では家の重要性が低下している。都会で増えたサラリーマン家庭に言えることである。都会でも、自営業の場合には、家はたんに生活の場であるだけでなく、経済活動の単位で、その家を存続させていくことは重要だった。後継者がいなければ、家業の継続もおぼつかなくなる。後継者のいないところは、将来性がないと見なされ、仕事の契約を安定的に得られないこともある。そうした自営業の家庭では、家の重要性が高い分、伝統的な祖先崇拜の信仰を取り入れる傾向が強い。ところが、サラリーマン家庭の場合には、家庭は生活の場でしかなく、経済

活動とは無縁である。サラリーマンは、毎日企業に出社し、仕事はそこでこなす。仕事と家庭生活とは完全に分離され、その分、家の重要性は低くなる。とくに、仕事という面で、家庭の存在は不可欠ではなくなっていく。とくに違うのが後継者の問題である。サラリーマンの家の子どもが、親と同じように企業に就職しサラリーマンになることはある。しかし、親と同じ企業に就職することは少ないし、親がしていた仕事を受け継ぐということは基本的にない。たとえ子どもが後継者にならなくても、あるいは子どもがいなくても、親は仕事で困ることがない。そこが農家や自営業の場合とは違う。仕事を続けるためにサラリーマンが家を守り続ける必要はなくなったのである。

家を受け継いでいく必要のある仕事についている場合、葬式は社会的に重要な意味をもつ。喪主になるのは後継者であり、葬式には後継者を披露する役割がある。ところが、サラリーマンの家では、葬式にそうした機能は期待されない。親が亡くなった場合には、会社関係の人間が葬式に参列することもあるが、仕事をすでに退いている元サラリーマンが亡くなっても、会社関係の人間はそれほど多くは参列しない。以前なら、それでもまだ、社員の家に死者が出た場合、会社の同僚などがそのお手伝いをすることはあった。しかし、会社での人間関係もしだいに希薄なものになり、会社の組織が葬式組の代わりをするともなくなった。そこには、「家の葬式」から「個人の葬式」への変化が見られる。農家や自営業では家のための葬式であったが、サラリーマン家庭ではあくまで個人のための葬式なのである（島田、2010、pp.144-146）。

葬式という場が、亡くなった人への弔いや遺族のけじめの場であるだけでなく、「家」という単位のためにあり、次の後継者を披露するための場であるという事がわかる。しかし、サラリーマン家庭が増加し、そういった目的がなくなっている。葬式の役割も少しずつ社会の流れとともに変化してきているのだ。

まとめ

葬儀と簡単にいっても、仏教、神道、キリスト

現代社会における葬儀

教といった宗教的な形式で大きな違いがあるのは当然の事であるが、それぞれの宗教の中でも様々な形式が存在している。我々が想像している一般的な葬儀の形式は勿論、仏式である。それは、仏教の宗教者、つまりお坊さんに来てもらい読経などをして、葬儀を執り行うというものである。しかし、そういった仏式においても都道府県や各地域、宗派の違いで、しきたりや風習、葬儀事情が大きく異なっている。それぞれの地域が抱える問題や事情によってその違いが顕著に現れている。地域によって異なるといっても、関西地方といった括りでみれば、細かな点では違っても大きくみれば同様の風習やしきたりがみられる。こういった葬儀の違いは、葬儀に参列する事以外で知るのは殆どないのではないだろうか。東京都のように火葬場が民営の方が多いうのも、人口が多く土地が少ないという特徴を顕著に表しているように思う。自分の住んでいる都道府県や地域がどのような葬儀を行い、どのような風習やしきたりがあるか調べてみるのも面白いのではないだろうか。

葬儀を行うには多額の費用がかかるという認識は一般的である。昔前には、お金をかけ豪華な式をあげるという事で、故人が生前に得た功績を称え、誇示するという目的もあった。勿論、後継者を披露する場でもあり中途半端な葬儀を出来ないという思いもある。葬儀にかかる費用も都道府県によって様々である。最近では、お金をかけず葬儀を行いたいという人も増加し、葬儀にかかる全国平均費用も減少傾向にある。装飾や料理にかかる費用を減らすだけではなく、家族葬といった家族や近親者のみで執り行う葬儀や、宗教にとらわれない無宗教の葬儀形式も増加している。以前の様な家とお寺との関係が希薄化している家が増加している。葬儀も近親者のみで行えば、参列者もなく料理や返礼品にかかる費用を抑える事が出来る。また、無宗教葬では宗教者を呼ばないので、戒名や読経のお礼である御布施を必要とせず、かなりの費用を抑える事が出来る。

自分自身の葬儀はどのような葬儀にして欲しいだろうか。お金をかけて欲しいか、それとも家族だけで行って欲しいか、宗教にとられる事無く自由な葬儀にして欲しいか。以前に比べて、我々

のニーズに合わせて葬儀の形式も大きく変化してきている。つまり、希望の葬儀を行うのも無理な話ではないのだ。しかし、葬儀の選択肢が増えたという事はその選択肢それぞれに、メリット・デメリットが存在しているということになる。これは葬儀だけに言えることではないが、一人ひとりが満足の出来る選択をできるために知識や情報を得る事が大切になる。

都心部では、サラリーマン家庭が増加し地域コミュニケーションの希薄化が進んでいる。地方では、葬儀の時には近隣の住人が手伝いに来てくれる。そういった地域の繋がりが都心部では殆ど無いのではないだろうか。これは葬儀だけではなく、近所付き合いといった点でも以前と大きく変わって来ている。葬儀が「家」という単位から「個人」という単位へ変化しているのも現代社会の様相を映し出している。

葬儀は故人の弔いの為だけではなく、残された遺族や関わりがあった人たちが故人との別れやけじめをつける場という意味もある。いくら葬儀にかけるお金を減らしたいという思いはあっても、葬儀を行わないという選択肢を選ぶ人は殆どいない。葬儀を行わなくても法律上問題はないのだが、では何故、行わないという選択をしないのだろうか。勿論、宗教的な事情はある。それだけではなく、何らかの形でけじめをつけたい、弔いたいという想いがある。それは、人類が古代から行ってきた葬儀というものは、形は変わっても根本的なものは変わらず残っているからではないだろうか。

この論文のテーマである現代社会における葬儀という、普段考える事のないものを知ることで、地域コミュニケーションの希薄化やサラリーマン家庭化、無宗教化といった変化が、葬儀にまで影響を与えている事が分かる。それだけ環境の変化の影響が大きいのだろう。人々の心に関わる葬儀は特にそういった変化に敏感なのだろう。葬儀というものは予期せず突然やってくる事が多い。人の葬儀だけではない。いつかは自分の葬儀も行われる。そういう事態を考えれば、葬儀というものや自分の葬儀について考える事は大切なのではないだろうか。勿論、自分の望む葬儀のイメージを大切にするだけではなく、残された人の事も少し

は気に留める事も必要である。これからも変化していく社会の様相に敏感になって、葬儀というものがどう変化していくのか見ていきたい。

引用・参考文献等

- 井上章一、1990、霊柩車の誕生、朝日新聞社
 小林和登、2009、「葬儀」という仕事、平凡社
 島田裕巳、2010、葬式は いらない、幻冬社
 高橋繁行、2004、葬祭の日本史、講談社
 保坂俊司、2006、戒名と日本人、祥伝社
 松涛弘道、1991、世界の葬式、新潮社
 神道の葬式 神葬祭 <http://sinsousaikami.seesaa.net/article/120899650.html>
 表現文化社 葬儀式とは <http://www.sogi.co.jp/sub/jituyou/chisiki/sougishiki.html>
 葬儀・お葬式ガイド 「葬儀 Q&A」 <http://www.sougiqa.com/contents/style.php#n02>
 無宗教葬 .com
<http://www.mushukyoso.com./bulletin>
 斎場図鑑 葬儀の必要性と不要性
<http://saijo-zukan.com/necessity/>
 位牌がよくわかる HP- 戒名について
<http://www.e-oihai.jp/ihai5-2.html>
 くらべる葬儀 HP- 葬儀費用について
www.kuraberusougi.com/info/sitemap.html
 いい葬儀 HP- 葬儀を行う - 葬儀費用
<http://www.e-sogi.com/okonau/hiyo.html>
 全国葬儀事情ガイド
<http://www.sogi-custom.com/>